どうか。米兵の一番下っ端が二〇〇ドルくらい、上は一〇〇〇ドルくらいになる。軍隊では衣食住ただです。使いたい放題使っても余るくらいです。

当時、私が多感な時代、ベトナム戦争がありました。米兵は沖縄から死を決意してベトナムに行きます。死を決意した男たちがやることは何か。金がいっぱいあるから、飲み食い、他にやりたい放題。犯罪をやっても逮捕されない。米兵の保養地として沖縄はありました。

そんな屈辱から解放されるのが日本復帰だったのです。私たちのスローガンは「核も基地も無い本土並みの返還」だった。それが何も実現されなかった。核も残り、基地も残り、復帰して四〇年余りたっても本土並みの経済的な状況もありません。むしろ、基地がそのまま残る。

天皇の戦争責任そして、戦後責任

昭和天皇は戦争末期からマッカーサーの支配のなかで、十一回もマッカーサーと会見している。戦争責任、東京裁判を逃れるために、マッカーサーに媚びを売っていた。

最初に差し出したのは、一九四七年九月二〇日に出された天皇メッセージ。これは復帰後アメリカで見つかった資料です。天皇はマッカーサーに琉球諸島を二五年ないし五〇年、あるいはそれ以上、占領してもいいと言っている。「日本の国民はそれを許すでしょう」と言っている。天皇メッセージが出される以前にも、アメリカとしては冷戦時代を想定して、極東に基地を置くことを考えていたと思います。でも、それを推進し、裏付けるのが天皇メッセージです。そのことが形として表れたのがサンフランシスコ講和条約の第三条です。

戦争責任というのは一九四四年二月の御前会議に近衛文麿という人が、「南方、フィリピンも陥落しつつある。今のうちに講和を持ち込んだ方がいい」と戦争終了の提案をするのです。ところが軍部の反対があり、天皇は最終的には、あとひと戦果あげてからでないと有利な講和に持ち込めないと終戦のチャンスがあったにもかかわらず、それを止めたのです。その結果、一九四五年の沖縄戦です。ヒロシマ、ナガサキがあり、東京空襲があり、大阪空襲があるのです。戦争を止めるチャンスがあるにも拘わらず、